

一葉『闇桜』論のために

——主にへ桃水の添削問題——

橋 本 威

一 制作の過程

樋口一葉の『闇桜』は、明治二五年三月二三日付発行の『武威野』第一編に掲載された。一葉が発表した最初の小説である。

明治二四年の一葉日記に、次の通りの記事が見える。

○書を半井君によす 明日在宅の有無をとふ成けり

(よもぎふ日記 二、明24・11・22)

○半井君より書状来る 幸閑ニ付来訪され度しとなり

(右同、明24・11・23)

○かしてへ行しは十一時成けん(中略)新作せんとおもふ小説の趣

向筋立などかたりておし^(ママ)へを乞はんとてのすさび成けり(中略)

骨子は片恋といふことにて侍りとて其筋だてなどかたる(右同、

明24・11・24)

一葉が明治二一年四月に詠んだ次の和歌を参考にすると、右の「趣

向筋立」は、或る程度『闇桜』に通じるものだったと思われる。

片 恋

かく斗思ふとだにも人しらはしなないのちのかひは有けり^(注1)

つまり、『闇桜』の発想の母体は、明治二四年一月二二日以前に、既に一葉の胸中に存在していたものようである。

明治二五年一月一日、小説の師、半井桃水より葉書を受け取^(注2)た一葉は、翌日、制作に着手した。日記に、次の通りである。

此夜より又小説著作にかゝる ことの外になまけたり(につ記
一、明25・1・12)

故関良一氏は、「一葉小説制作考」に「日記によれば一月十一日に本年最初の桃水よりの書状に接したことが着手の直接の動機となつたらしく、十二日に起稿」と述べておられるが、その翌日、上野図書館へ行って小説の材料を探している事から判断すると、この日は殆ど文^(注3)

字にならなかつたのであろう。従つて、実質的な起稿は、次に執筆記事の出て来る同年一月二十七日であつたと思われる。次の通りである。

○午前より小説稿にかゝる

(につ記 一、明25・1・27)

○終日小説従事 (右同、明25・1・28)

○半井うしへはがきを出す 明日参らんとて也 しばらくにしてう

しよりもはがき来たる 明日拜顔したし 来駕給はるまじきやとの文体也 こはおのれが出したるに先立てさし出し給へるなるべし

(右同、明25・2・3)

○平川町へつきしは十二時少し過る頃成けん(中略)昨日書状を出

したる其用は今度青年の人々といわばいたく大人顔する様なれどまだ一向小説にはざる若人達の研究がてら一ツの雑誌を発売

せんと也(中略)君をも是非とたのみて置きぬ 十五日までに短

文一篇草し給はずや(中略)など詞を尽して仰せ給ふ さればよろしく取斗らひ給ひてよ 実はこの頃草しかけし文御めにかけば

やとて今日もて参りぬ 完成のものならねどとて持てこし小説一覽に供す よろしかるべし これ出し給へ(中略)などものがた

らる (右同、明25・2・4)

明治二五年二月四日は、後に一葉が「雪の日」と呼んだ日であるが、この時、一葉が桃水に見せたのは、「闇桜」(上)の前半部ぐらいであつたろう。以後、日記によれば、次の如き経過で、「闇桜」は二月

一四日に完成する。

○朝来机辺にあり

(につ記 二、明25・2・10)

○小説十五日までに半井うしへ送るべき約なるに期日も近づきぬ

まだ上の巻斗にて中下とも残れり (右同、明25・2・12)

○朝来小説にかゝる 終日従事 此夜終夜 暁がたに少しねむる

(右同、明25・2・13)

○終日小説 = 従事 灯明に及んで全備す 半井うしへはがきを出す 明午後参らんとて也 重荷おろしたる様になりて今宵はいたく安心す

(右同、明25・2・14)

○九段坂上より車に而いたる(中略)小説一覽に供す いたくほめらる(中略)雑誌の名ハむさしのとつきたるよし 遅くも来月一日頃までには発売すべき見込也といふ (右同、明25・2・15)

「武蔵野」の創刊は、予定より延びて、前述の如く、三月二三日付となるのである。

(注)

1 「詠草19(百首歌・当座)第二次歌集」「恋百首」I、51。

2 「につ記 一」明25・1・11に、「半井君よりはがきつく」とある。

3 「につ記 一」明25・1・13に、「図書館へ行く 九時頃より

家をば出づ 太平記大和物語をかりる 但し大和ものがたりは、ミずして太平記のミ閲覧す 三時頃出館 家にかへる」とある。

二 桃水の小説指導

一葉は、明治二四年四月一日、半井桃水の弟子となり、明治二五年六月二二日、その直接の師弟関係を絶った。その間、桃水の小説指導を受けている。「闇桜」は、桃水の指導下に完成した最初の作品である。桃水の小説指導の大体は、一葉日記から推測する事が出来る。

最初、一葉は、桃水が添削という形の指導を行うと思っていたらしい。明治一七年一月から二月まで、和田重雄に和歌の通信添削指導を受け、更に、明治一九年八月の萩の舎入門直前から塾主中島歌子の和歌添削指導を受けていた^(注1)。一葉としては、それも当然であった。歌子には、作文の添削も受けている。桃水初訪問の日、一葉が「したゝめ置たる小説一回分丈差置て」(若葉かげ、明24・4・15)帰ったのは、添削を予想又は期待しての事だったろう。その「小説一回分」についての桃水の指導は、次の訪問の日の日記に、次の通りに記録されている。

種々のもの語りども聞えしらせ給ひて先の日の小説の一回新聞にのせんには少し長文なるが上に余り和文めかしき所多かり 今少し俗調にと教へ給ふ

(若葉かげ、明24・4・22)

この日、一葉は、再び「昨夜かきたる丈の小説の添削給へとて」(若葉かげ、明24・4・22)草稿を置いて帰り、翌々日の二四日、更に

その続稿を桃水宛に郵送した^(注3)。その草稿に対する桃水の指導は、次の通りであった。

小説の事ニつきてもねんごろに聞えしらせ給ひて此次はかゝるもの書ミ給へ おのれかねてよりかゝんの心組み有しかども暇を得ずして日頃過ぬとてかくくしてかくせばをしからんなど物語り給ふ

(若葉かげ、明24・4・25)

記憶の曖昧な、時間的に混乱した記述ではあるが、この辺の小説指導のあり方については、桃水自身も次の通りに説明している。

十日余経て短篇小説を持参されましたが、誠に見事な筆跡で色紙短冊に書いたらばと思ふものが、十行の罫紙の中にさらくと認められて、文章も結構でしたが少し結構過ぎて新聞や雑誌には如何かと思はれました、其の上趣向が宜しくないので、私は私だけの考へを述べました、(半井桃水「一葉女史」——「中央公論」明40・6)

一葉の日記より、桃水の小説指導に関わる以後の記事を拾い上げると、次の通りである。

○桃水君をとふをしえをこはんとて也(中略)小説のことに付而種々ものがたりどもあり 例のねんごろにをしゑを給ふ

(若葉かげ、明24・5・8)

○前約の小説稿成しをもて桃水ぬしにおもむく(中略)種々我が為よかれのものがたりども聞えしらせ給ふ

(右同、明24・5・27)

○例刻より桃水うしをとふ(中略)此次の趣向ものがたりて君が説をとひ参らずに思ふふし名残なくいひ聞せ給ふ

(右同、明24・6・3)

○半井君をとふ(中略)小説ニ付てしばし物語りして先に送り置たるなん此頃変名にて世に出さばやなどの給ふ

(蓬生日記 一、明24・10・30)

○かしこへ行しは十一時成けん(中略)新作せんとおもふ小説の趣向筋立などかたりておしへを乞はんとてのすさび成けり(中略)骨子は片恋といふことにて侍りとて其筋だてなどかたる そはいとよかるべうこそ 其くだりはかくくせばよからん こゝはかくせばなどの給ふ

(よもぎふ日記 二、明24・11・24)

○平川町へつきしは十二時少し過る頃成けん(中略)実はこの頃草しかけし文御めにかげばやとて今日もて参りぬ 完成のものならねどとて持てこし小説一覽に供す よろしかるべし これ出し給へ(中略)などもがたらる(につ記 一、明25・2・4)

○九段坂上より車に而いたる(中略)小説一覽に供す いたくほめらる (につ記 二、明25・2・15)

○武蔵野雜誌次号に出すべき趣向のあらまし文して半井君へ送る

(右同、明25・3・10)

○午後より半井君へ行く(中略)昨日の好事とは君が別著の小説改

進新聞に出さんとするの一事也といふ(中略)原稿今一度校閲せんとて我が方に引取る 作りかへんとて也 四十回になしくれよの頼ミなれど三十五回ほどにてよろし 先ハふん発し給へとて渡さる 今夜中に二回ほどお回しありたし 廿九日より掲戴(マヤ)都合なればなどの給ふ 了承して帰る(中略)此夜十時二回分の校閲終りて母君と共に半井君のもとへ行く (日記、明25・3・27)

○午後より大人のもとを訪ふ むさし野来月分趣向につきてなりけり (につ記、明25・4・21)

右のうち、「閣桜」に関わる記事は、前に引用した明治二四年一月二四日、明治二五年二月四日、二月一五日のものだけであるが、一葉が桃水に師事していた全期間を通じて、桃水が一葉の原稿に直接手を加えた事を匂わず記事は、全くない。

明治二五年三月一〇日の、桃水の指導を求めた一葉の手紙も、次の如き調子のものであった。

実は先もし御はなし申上んとせし趣向二つあり(中略)いづ方に致せしものか思し召伺度御をしへのほど願上参らせ候

初めて一葉の文章に接した桃水は、前掲の如く、「少し長文なるが上に余り和文めかしき所多かり 今少し俗調に」と、表現面の指導の言葉を吐いたが、その後は、専ら「趣向」について口頭で指導している。恐らく、「色紙短冊に書いたらばと思ふ」「誠に見事な筆跡」と、「結構過」ぎる文章表現と、更には「宜しくない」「趣向」とが、添

削指導を断念させ、「趣向」中心の指導へと切りかえさせたのであろう。桃水が一葉の筆跡を如何に愛していたかは、次からも明らかである。

○半井うしを午後よりとふ　むさしのゝ表題の文字書きくれ度ともしばくいろいろひたれど聞かるべくもあらねば十字斗しるしぬ^(注4)

(日記、明25・3・23)

○兄は、一葉さんが亡くなられたあと、その手紙を額に入れて飾っていました。^(注5)

(浦野幸「一葉の思い出」―「朝日新聞」昭30・11・24)

故塩田良平博士は、一葉の日記に「桃水には小説の趣向を与へられたり、小説の趣向を相談したりしたことは記してあるが添削されたと書いてあるところは「一ヶ所もない」と認め乍ら、『闇桜』について、「桃水が字句を添削してもそれは当然のこととして、さういふことまで一葉は記録しなかつたのではないかと思はれる。」と、判断して居られる。しかし、もし桃水が一葉の草稿を自由に添削していたのだとすれば、「趣向」の指導については屢々日記に記録し乍ら、添削に全く触れていないのは、余りにも不自然なろう。前述の通り、中島歌子は、一葉の文章の添削も行ったが、その記録が日記に次の如くある。

○早うものし初たるなむ師の君に一回丈添削を乞いたるあり^(ママ)

(蓬生日記　一、明24・10・7)

○小時にて師君のもとに行(中略)小説ミばや　われにも又考案あ

りなど心切にの給ふ^(ママ)　(につ記　一、明25・1・9)

そして、現に、伝わっている明治二四年秋執筆の作品『棚なし小舟』(甲種)の草稿には、歌子の朱筆が加えられている。和歌の添削稿については言う迄もない。既述の、一二歳の時の、和田重雄の添削稿さえ保存されている。然るに、桃水の添削稿は、断片すら存在していないのである。

『闇桜』の校正について、桃水は次の如く一葉に諒解を求めた。

むさしのハ種々延々になる事ありていよく明後廿日出版の都合なり　校正も回り来たりしが我が転宅の日成しかば君のもとに回さん日間もなく我れ代理をなしたるに近し　誤字脱字などあらばゆるし給へ　(日記、明25・3・18)

『闇桜』だけに問題を限るとして、これが勝手に添削した人間の吐く言葉であろうか。

(注)

1 「詠草1」。本文一六葉の添削歌稿の「詠草　綴」である。

2 日記によれば、一葉の萩の舎入門は、「明治十九年の八月二十日」(藤之中、明26・8・10の後記)だが、「詠草5」に、入門前に萩の舎へ提出した歌子添削の宿題歌稿が収められている。

3 「若葉かげ」明24・4・24に、「廿四日まで草稿名余なくしたゝめぬ(中略)其夜郵便して草稿ハ半井うしに送り参らせぬ」

とある。

4 第二編、第三編の題字に用いている。

5 半井桃水の実妹。

6 塩田良平「一葉に与へた桃水の文学的影響——闇桜初稿本を通し

て——」——「国語と国文学」昭27・3。

三 『闇桜』甲文との関係

昭和十九年、「武蔵野」第一編所載の現行本文（以下「乙文」とする。）と多少の異同を有する半井家蔵の一葉浄書草稿『闇桜』（以下「甲文」とする。）を世に紹介された故塩田博士は、昭和二十七年、前章で一部を引用した「一葉に与へた桃水の文学的影響——闇桜初稿本を通して——」を発表し、両者の関係を次の通りに推測された。

「闇桜」は一葉の浄写原稿を桃水が保存しようと思ひ、その下書又はそれを筆写させたものを印刷に附したこと。その際桃水が原文に手を入れたこと。その訂正は形式上に止まり、その趣向内容について予め彼が同意し、或は既に示唆を与へてあつたかも知れないこと。そしてこの方法は、一葉が桃水と別れるまで、或程度一葉の全作品に行はれたらしいこと等を説明したわけである。

右について、故関氏は、前述論文で「その下書又は」の部分に「はぶいてしたがふのが、もつとも自然ではなからうか。」と述べ、塩田論文を支持して居られる。笹淵友一博士が、「『文学界』とその時代

下」で「桃水の添削が加へられてゐると解される」と述べられ、故和田芳恵氏が、『日本近代文学大系8 樋口一葉集』の「解説」で「桃水が補正の筆を加えてもいる」として居られるのも、塩田論文が根拠になっていると考えられる。

筑摩版『樋口一葉全集 第一巻』の「闇桜」〔補注〕に、甲文について、「（中）の本文は（上）のすぐあとに書き継がずに、余白を残して折返し裏から始まっており、（上）と（中）（下）の浄書が段階的に行なわれた事を感じさせる」とある。前に引用した『闇桜』の制作経過を示す一葉の日記記事に照らし合わせて、「この稿本が、明治二十五年二月十四日に脱稿して、十五日に桃水に届けられた草稿である事に間違いはない」という同〔補注〕の推定は、正しいであろう。そして、同〔補注〕が述べているように、「稿本本文の筆写が行われ、その際に修訂の加えられたものが、公けにされた本文の稿本と成ったと考えられる」ということになる。問題は、一葉が甲文を桃水に届けた明治二十五年二月一日から、「武蔵野」第一編を印刷に出すまでの間に、「修訂」を加えたのが一葉自身か、桃水か、という点である。塩田論文は、その「修訂」を桃水の手によるものだが、その主な論拠に「甲文は著しく桃水的な用字法で乙文に改められてゐることを挙げ、次の通りに説明している。

甲の平仮名が乙では漢字に改められてゐる。（勿論この逆もあるが）その改め方にも、もう（最早は乙文）いやよ（否よ）しかし（併し）からくり（機関）あるくと（歩行と）だしぬけに（唐突に）の如きは、勿論一葉自身の訂正といへないことはないがあるくを扱

行などと同一人があとから書き改めるとは常識的には考へられない。寧ろそれより以上注目すべきことはこれらの漢字の多くは桃水が當時使用して居ることである。殊に、助動詞の給ふは、一葉の日記をはじめ初期作にはこの給ふを用ひてゐるのが乙文には一二字を除くの外、他は尽く玉ふ又はたまふに改められてゐる。この玉ふは當時の常用ではあるが桃水の作には殆んどこの玉ふ又はたまふが用ひられてゐる。(中略)又逆に一葉の慣用字に斗りがある。これも殆んどばかり、ばつかりに改められてゐることである。

以下、右の記述内容を吟味してみたい。

1 「タマフ」について

甲文と乙文とを比較すると、次の通り。

	〈甲文〉	→	〈乙文〉
(上)	来給ふな	→	来玉ふな
	入り給ふ	→	入り給ふ
	見給へ	→	見玉へ
(中)	思ひ給ふぞ	→	思ひ給ふぞ
	隠したまふは	→	隠し給ふは
	愛し給ふなれ	→	愛し給ふなれ
	望みたまふらん	→	望み給ふらん
	し給はじ	→	し給はじ
(下)	見給へ	→	見たまへ

見給はゞ → 見給はゞ

右を型としてまとめると、次の通りになる。

	〈甲文〉	→	〈乙文〉
Ⓐ	給ふ	→	玉ふ (二例)
Ⓑ	給ふ	→	たまふ (一例)
Ⓒ	たまふ	→	給ふ (二例)
Ⓓ	給ふ	→	給ふ (五例)

塩田論文の言う「乙文には一二字を除くの外、他は尽く玉ふ又はたまふに改められてある。」に該当するのは、「タマフ」全一〇例中、Ⓐの計三例に過ぎない。その上、甲文で二例あった「たまふ」は、乙文では、逆に一例に減っている。塩田論文は、先ず、重大な事実誤認をおかしている。

「一葉の日記をはじめ初期作にはこの給ふを用ひてゐる」云々にしても、『閨桜』制作時の、明治二五年一月一日から二月二九日までの日記を調べてみると、動詞の場合や「タマハル」「ノタマフ」をも含めて、該当する八五例のうち、約一割の八例はひらがな表記になっている。次作の『たま櫛』(明25・3作)でも、二一例の「タマフ」「タマハル」のうち、四例はひらがな表記である。なお、明治二五年に書かれ発信された事の明確な一葉通の(注4)「給ふ」四例、「給はる」「賜りもの」各一例の他、ひらがな表記の「たまはる」二例、「うけたまはる」一例がある。

「玉ふ」は、確かに一葉の初期記述物には見えないようだが、次の如く、後年の書簡には見えるものである。

○捨て玉はぬ斗りか

(明27・2、久佐賀義孝宛)

○わらひ玉ふな

(明27・2・27、星野天知宛)

○かくさせ玉へ

(明29・5・16、星野天知宛)

何れにしても、一〇例の「タマフ」表記が、甲文では「給ふ」八例、「たまふ」二例であったのに、乙文で、桃水の添削の結果、「給ふ」七例、「玉ふ」二例、「たまふ」一例にかわったというのは、奇妙である。この種の「添削」とは、一定の基準の下に、意図的に表現改善を図る行為である。然るに、乙文では、却って「タマフ」表記の混乱に拍車がかかっている。

元来、一葉には、文字の使い分けに自墮落な面がある。現に、甲文には各章に題名が付してあるのだが、(上)(中)が「闇桜 上」「闇桜 中」とあるのに対し、(下)は「やみざくら 下」と仮名書きになっている。まさか、(下)の執筆に際し、漢字表記の題名を、意識的に仮名表記に変更した訳ではあるまい。もしそうであれば、遡って、(上)(中)の題名表記も訂正しなければならない。晩年の『裏紫』(明29・1、《上》脱稿)では、発表された「裏紫」(上)に対し、未完の(中)は、未定稿Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで「うらむらさき」(中)と

題されている。^(注5)『この子』(明28・12脱稿)では、未定稿Ⅲは発表作と同じ題表記「この子」であるが、未定稿Ⅱでは「此子」であった。

しかも、発表作の本文には、「此子」^(注6)「此子」^(注7)が各五例あるのに、「この子」という表記は一例もない。「文学界」初出の『暗夜』(明27)は、「文芸倶楽部」再掲(明28・12)では「やみ夜」^(注8)になっている。

しかも、『暗夜』執筆当時、一葉は、この自作の題名を、日記に「やみ夜」(水の上日記、明27・7・19)「やみよ」(同前、明27・7・22)と記している。重要な題名の表記すら、こういう具合であった。

かかる表記上の無神経さは、恐らく、変体仮名を筆墨で記す習慣に基づくと思われる。字体が一種でない漢字体の仮名文字を美術的に用いる事が、漢字と漢字、漢字と仮名の使い分けをルーズにし、かつ字面の美しさを尚ぶ意識が、前後の文字や気分などにもよって、放縱に文字を選ぶ性癖を作り上げていたのである。

しかし乍ら、乙文の筆写に際し、当時の自己の慣用字でない「玉」を二度採用したところには、確かに桃水の影響があったと思われる。一葉は、小説修業の一つとして、師桃水の著書を借読している。次の通りである。

○君が著作の小説四五冊を借参らせて出ぬ

(若葉かけ、明24・4・15)

○小説本四五本かりて又こそ参らめとてたつ

(蓬生日記 一、明24・10・30)

塩田論文に言う如く、「桃水の作には殆んどこの玉ふ又はたまふが

用ひられてゐる」のであれば、ここに、桃水の著書からの影響を見る事は、さして不自然であるまい。

2 「バカリ」について

甲文と乙文とを比較すると、次の通り。

〈甲文〉―――→〈乙文〉

(上) うそ斗。―――→嘘ばつかり。

ことを。―――→こと許かし。

笑ひ声斗―――→笑ひ声

きく斗が―――→きくばかりが

(中) 所へ斗―――→処へばつかし

(下) 一月斗の―――→一日ばかりの

じつと斗―――→じつとばかり

狂する斗―――→狂するばかり

塵斗も―――→さらにも

二あし斗―――→二足ばかり

以上を型としてまとめると、次の通りになる。

〈甲文〉―――→〈乙文〉

① 斗―――→ばかり (五例)

② 斗―――→ばつかり (一例)

③ 斗―――→ばつかし (一例)

④ 斗―――→ナシ (二例)
 ⑤ ナシ―――→許かし (一例)

「タマフ」の場合とは異なり、塩田論文に事実誤認はない。また、「バカリ」にあてる「斗」は、塩田論文の指摘通り、当時の「一葉の慣用字」である。矢張り明治二五年一月一日から二月二九日までの一葉日記を調べてみると、二二例の「バカリ」が全て「斗」と表記されている他、動詞「ハカル」に「斗」をあてた二例も存在する。

だが、桃水が添削した筈の全くない『うもれ木』(明25・12発表)や『雪の日』(明26・1脱稿)において、次の如く、未定稿の「斗」が発表作で同様に改められているのは、どう説明すればいいのであろうか。

○『うもれ木』

東京の地に斗 (未定稿A II 3)

東京の地にばかり (発表作、第一回)

三十斗の (未定稿B II 4)

三十計の (発表作、第二回)

四ツ斗の (未定稿C IV 5)

三ツ斗の (未定稿C IV 6)

三歳ばかりの (発表作、第三回)

○『雪の日』

引入る斗 (未定稿IV 1)

引入るばかり (発表作)

「斗」は、確かに、「バカリ」表記の、一葉の慣用字であった。前項の場合と同じ明治二五年の一葉書簡一九通でも、九例の「バカリ」のうち、八例は「斗」であり、「ばかり」は一例のみである。^(注9)

しかし、日記も書簡も、日常的、生活的、私的なものである。当時の一葉は、一篇の小説さえ発表した事がなく、小説とはどのように書くべきものであるかを懸命に模索していた。習作や下書きなら兎も角、発表原稿に、日常的な慣用字を安易に用いるとは限らない。次作の『たま櫛』でも、発表作では一例の「バカリ」のうち、一〇例は「ばかり」であり、「斗」は一例しかない。^(注10)『うもれ木』では、一四例の「バカリ」のうち、「ばかり」が九例、「計」が三例、「許」が二例で、「慣用字」である筈の「斗」は一例もない。^(注11)『雪の日』でも、六例の「バカリ」のうち、「ばかり」が五例で、「斗」は一例だけである。一葉は、未定稿では「慣用字」の「斗」を比較的気儘に用いたが、定稿の浄書に際して、それを、桃水の著書によって学んだ当時の小説の一般的表記「ばかり」に改めた——そう考えるのが至当であろう。助詞「バカリ」を「斗」と表記して発表する事は、漢字・仮名の使い分けに無頓着であった一葉も、当時の小説の一般的常識に反する事として、流石に躊躇されたのだと思われる。或るいは、そこに、桃水の助言があったと仮定してもいい。『たま櫛』に一例あった「斗り」、『雪の日』にも一例あった「斗」は、訂正のし損ねであろう。

制作の経過で明らかかなように、完成作を目にする明治二五年二月一日以前、桃水は、その僅かな一部、恐らくは(上)の前半にあたる部分を、閲読しているだけである。その師に一応の完成原稿甲文を届ける時、一葉は、それがそのまま印刷所へ回されると想定していた

であろうか。生まれて初めての、しかも師桃水の好意による小説発表なのである。当然、師の助言を予想していたに違いない。前に引用した「(中)の本文は(上)のすぐあとに書き継がずに、余白を残して折返し裏から始まっており、」という書かれ方、また、各章それぞれに題名が付され、しかも、(下)では「やみざくら」と平仮名表記であった事などが、甲文の性格を示している。桃水に「いたくほめられ、つまり師の承認を得て、改めて、多少の訂正を施しつつ本当の定稿——印刷所へ回す原稿を浄書したと考えるのが、最も自然である。塩田論文によれば、甲文が「半井家に保存されてゐたのは、一葉の草稿が余りに美しかったために、記念にとつておいたものだといふ」事である。乙文浄書は、甲文を保存したいという桃水の希望も伝えられた事だったのである。

兎もあれ、塩田論文の「バカリ」についての指摘は、事実の認定としては正しいにしても、桃水が添削した事の証明にはなり得ていないのである。

3 その他の用字について

塩田論文は、「あるくを歩行などと同一人があとから書き改めるとは常識的には考へられない」と述べているが、『別れ霜』(明25・4発表)の未定稿^(注12)には、次の如く「歩行」の用例が見える。

○ 歩むあし元(未定稿A 吹くる風)
歩行む足元(未定稿B 第四回)

○「お歩行は (未定稿 A 吹くる風)

御歩行は (未定稿 B 第四回)

○歩行共無く (未定稿 B 第十一回)

右のうち、最初の例は、初めの草稿で「歩む」と表記したものを、後の草稿で「歩行む」と改めたものである。「アルク」でなく「アユム」ではあるが、「同一人があとから書き改め」たと考えられる。「たま櫛」にも「庭歩行に」(上の二)という用例があり、『うもれ木』にも、「大歩行の姿」(未定稿 C IV 5)「青天を歩行くさへ、」(第四回)という用例がある。創作という極めて意図的な表現活動に、恣意的な日常生活次元の「常識」は通用しないのである。

塩田論文が列挙した「アルク」の他の用字例も、何れも、一葉の全小説に見られる宛字の用字法に属するものである。『闇桜』乙文の非一葉的性格を物語るものではない。『闇桜』に近い時期の発表作から、同様の用字法によると思われる用例を、目につくままに抜き出すと、次の通りになる。但し、同一作品で重ねて用いられているものは省いた。

○「たま櫛」

- (上の二) 暫時・佇立め(上の二) 風説・不密さ・心情・婦人・訪問・嫌疑・近辺・灯火・命令・稚児・莞爾に・等閑に・真実なる・仮令・断念め・小生・往昔・赤心・企望・嫣然と(中の一)
- 単衣・拙郎・風流やかなる・市中・別室・人品・高尚かり・隣家
- ・彷徨・流石に・軽忽しさ・刀尺・素繩師・逍遙・別亭・四隣・

○「うもれ木」

威勢・活計・老爺・病亡(中の二) 幼強・主君・嗤笑・真実なる・徐ら・莞爾と(下) 扱も・往日・开所・可惜・何方・記念

(第一回) 砂子打ち・錦様・工み・天晴・此処・結局・何方・費用・痴漢・自己・道理・其処・那辺・何時(第二回) 流行・浴衣・白粉・招牌・扮粧・無形・襪襪・手巾・其方・由緒・商売・浴衣・髻・何れ・元来・四辺・暫時・身軀つき・老人・切めて・身姿・態と・洋刃・はて扱・彼奴・此方・一顆・何処・可笑し・懐中・老婆・冷笑で・不審し・此方・名告(第三回) 彌々・纒かに・左まで・何処・右手・衡門・尊め・住居・自然・顧見れ・面貌・辨解・領足・黒子・彼奴・彷徨・扣へ・汝れ・何処・庇護・白眼・元来・漸々に・今歳・朋友・倍(第四回) 彷徨・鼻負・怒ひ・爾かも・何某・开処・最初・愁らく・理由・屑よし・表面・薯預汁・実には・慚る・平常・誰君(第五回) 電馬・四方・一方・某・輩・実・嗤笑ひ・盲目・石陶器・風説(第六回) 最初・動く・虚言・懐かしく・親族・交際・長閑に(第七回) 活計・都度・去年・止々・衣類・曠衣・服装・平常着・一向・彼方・点灯ごろ・紙嵩・回し独楽・処為・価値・同胞・譚言・再度・最惜し・聖七種(第八回) 魁がけ・風聴・踏たふ・今宵・摩する(第九回) 消り・真情・達て・断念・他処(第十回) 斯道・冷笑・莞爾と・就て

○「雪の日」

浦山し・八千度・勿躰なや・墳墓・媒・某・他家・真実・何方・容貌・離室・習慣・実に・小児・可惜・不品行さ・其方・臨終・

嗤笑・抑も・四壁・一向・漸々・法・門閥家・然か・猶さら・年来・以来・断然と・譏言・哭き・疾ましき・何処・詠むれ・流石に・此処・不図・同一・抑々・老実・老僕・扱・無情かり・斯く・良人・総べて

右のうち、「雪の日」の「譏言」「同一」は、未定稿では、それぞれ「さかしら」(Ⅱ3)「ひとつ」(Ⅳ1)と仮名表記になっている。定稿制作の過程で、漢字表記に改められたものであろう。

後年、一葉は、文学者としての桃水を、次の通りに批判した。

桃水うしもとより文章粗にして華麗と幽棲とをかき給へり 又みづからも文に勉むる所なくひたすら趣向意匠をのみ尊び給ふと見えたり (よもぎふ日記、明26・2・23)

「みづからも」の「も」が、特に注目される。この「も」は、一葉に対する桃水の小説指導のあり方を如実に語っている。右の記述からも、桃水が一葉に添削指導を行ったとは考えられないのである。

塩田論文の、次の通りの結論は、まことに妥当であると思う。

桃水の文学的影響は一葉にとつてマイナスであつたといふことではなく、小品作文風の初期の断片に小説の形式と骨法とを教へ、一応小説の体をなさしめたものは何といつても桃水の指導力によらねばならなかつたのである。但し、さきにも記したやうに桃水の指導

には限界があつた。もり上つてくる一葉の文学的情熱に対して、その正しい表現法を教へるだけの力がなかつた。

しかし乍ら、塩田論文は、桃水の添削を少しも立証していないばかりか、そこに示されているその証拠なるものは、寧ろ、一葉自身による「修訂」の可能性を語っているものである。そうであるからには、今暫くのとらへ、甲文、乙文ともに一葉自身の表現であるとしておかねばならないであろう。

(注)

- 1 筑摩版『樋口一葉全集 第一巻』では「未定稿B」。ここでは、塩田論文の呼称に従う。
- 2 前述の如く、「日記」明25・3・18に桃水が校正を代行した旨の記事が見えるので、それより前である。
- 3 「につ記 一」「につ記 二」。なお、明治五年は閏年である。
- 4 『明治文学全集30 樋口一葉集』の「書簡集」、八〇一四、二六〇二八三三〇三九、四三、四九。
- 5 発表誌「新文壇」の編集者が勝手に漢字表記に改めたとする説には、根拠がない。拙論「一葉『裏葉(上)』『ノート』」『梅花女子大学開学二十周年記念論文集』(昭60)参照。
- 6 拙論「一葉『この子』覚え書き」——本誌22号(昭59・12)参照。
- 7 目次は「闇夜」になっていた。
- 8 本文各頁の柱は「暗夜」となっていた。
- 9 「斗」は、八、一四、二七(三例)、三八、三九(二例)に見え、「ばかり」は、三五に見える。なお、三五には、動詞「ハカル」に「斗」をあてた用例が二例ある。
- 10 「斗り」は(下)に、「ばかり」は、(上の一)に二例、(上の一)に

二例、(中の一)に四例、(中の二)に一例、(下)に一例ある。なお、(中の一)の「見ゆるばかり」は「り」の脱字である事が明らかなので、「ばかり」とした。

- 11 「ばかり」は、(第一回)二例、(第二回)一例、(第三回)二例、(第六回)一例、(第七回)二例、(第九回)一例。「計」は、(第二回)(第八回)(第九回)各一例。「許」は、(第三回)(第六回)各一例。
- 12 「改進新聞」掲載の、初出の未定稿である。

〈付記〉

- 1 書簡を除き、一葉の記述物の引用は、すべて筑摩版『樋口一葉全集』に拠った。
- 2 一葉書簡に関する記述は、すべて『明治文学全集30 樋口一葉集』の「書簡集」に拠った。
- 3 引用文は、引用するに際し、常用漢字体のある旧漢字は、すべて常用漢字体に改めた。
- 4 本小論は、手許にある草稿「一葉『蘭桜』覚え書き」の前半部分を、独立の論としたものである。